

「脅しあい」「いがみ合い」をやめ 多様な「共通の未来」を作る。

—地球市民の書棚から③⑦

地球市民 大村 昌宏



隣国同士の「ののしり合い」「いがみ合い」。これに「核」を使った「脅し合い」が加わる。…やり切れない、恐怖すら感じる。愚かな為政者達に「未来」を奪われるのはゴメンこうむりたいものだ。「国民の生命と財産を守る」安全保障の第一は、敵を作らないことのはずだ。嫌悪感、憎悪感を煽ってどうするのだろうか。

しかし、歴史家のキャロル・グラックさんと学生達との対話を紹介した「戦争の記憶」を読んでホッとした。「希望」があり、一市民として出来ることがあるのだ。キーワードは「共通の記憶」だ。キャロルさんは、「私たちに変える責任があるのは過去ではない。未来なのだ。」と述べている。そして「開かれた対話こそが、多様な過去と現在を繋げる道である。それは同時に、多様でありながらも共通の未来を想像するための道でもある」と。

キャロル・グラック 著「戦争の記憶 コロンビア大学特別講義—学生との対話—」

2019年 講談社

(目次)

はじめに

1 MEMORY AND HISTORY

「歴史」とは何か、「記憶」とは何か

2 OPERATIONS OF MEMORY

「戦争の記憶」はいかにして作られるのか

3 THE COMFORT WOMEN IN PUBLIC MEMORY

「慰安婦」の記憶

4 THE PAST IN THE PRESENT

歴史への責任——記憶が現在に問い掛けること

おわりに

「歴史」と「記憶」

グラックさんは、「歴史」と「記憶」を明確に区別する。「歴史」は過去に実際に起きたこと。歴史家が、史実を掘り起こし、検証し、より正確になっていく。

一方、「記憶」は、多様だ。なぜなら記憶は「個人」そ

して「社会集団」にあるからだ。「個人の記憶」は、一人ひとりの「体験」や「見聞きしたこと」だ。これは、記憶を語る度に再構成され変化していく。「社会集団の記憶」も、「公の場」「民間」「メタメモリー(論争)」の相互作用で変化していく。

「社会集団の記憶」で典型的なのが「戦争の記憶」だ。これは「国民の物語」として国によって大きく異なる。

異なる「戦争の記憶」

第二次世界大戦について、米国では、ドイツと日本の侵略に対する「良い戦争」。ロシアでは、ドイツの侵略に対する「大祖国防衛戦争」。中国では「長期に渡る日本の侵略」とこれに対する「不屈の抵抗」「抗日戦争」。韓国では「日本による植民地搾取」だ。では日本ではどうだろうか。「軍部による無謀な戦争に巻き込まれた…」。国によってこれほど違うのだ。

今、起きている「いがみ合い」は、一方的にこの違いを煽り、感情的な対立にし、政治的に利用している者達がいるからだ。